

災害を乗り越えて ふるさとの今がある

いせわんたいふう 伊勢湾台風

「伊勢湾台風」は上陸時、日本では史上3番目に気圧が低い929.2hpa（ヘクトパスカル）を観測した超大型の台風で、室戸台風、枕崎台風と並ぶ昭和の3大台風といわれています。

1959（昭和34）年9月26日の夜に上陸した「伊勢湾台風」による高潮のため、木曾岬村（当時）の南半分の堤防は寸断され、死者328名、家屋流出171戸、全壊95戸などの今まで経験したことのない大きな被害を受けました。木曾岬町内には、現在もたくさんの慰霊碑が残っています。

台風によって学校も損傷を受け、12月に仮復旧するまでの間、小中学生は三重県鈴鹿市内の鈴峰荘という施設で、教師とともに寄宿生活を送りながら勉強しました。親と離れての生活はとても寂しいものだったそうです。

被害からの復旧のために、たくさんの人々が天秤棒を担いだり、トラックを押したりして、作業をしました。しかし、台風による塩害で、その後何年も田畑が不作となるなどたくさんの苦労がありました。



当時の伊勢湾台風の様子（木曾岬町提供）

学習のめあて

伊勢湾台風は、私たちの郷土三重県を襲った未曾有の自然災害です。この台風は、発生から上陸までの期間が6日間と短く、発達したまま上陸しました。暴風圏が非常に広く、東西に伸びた停滞前線が刺激され大雨をもたらしました。また、上陸後も強い勢力を維持したことによる風の被害や、さらには伊勢湾に高潮を発生させる最悪のコースを通ったことも重なって、被害が一層大きくなりました。

今までに例のない大きな被害をもたらすことになった伊勢湾台風の被害の甚大さや、復旧へ向けた人々の苦労の様子、そして、郷土の人々が多くの尊い生命や貴重な財産を失った悲しみや絶望を乗り越えて、どのような思いで今日の暮らしの礎を築いたかなどについて考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 伊勢湾台風はどのような被害をもたらしたのでしょうか。
 - 2 当時の写真、被災された方々の話や作文等から、どのようなことを感じましたか。
 - 3 伊勢湾台風の後、人々はどのような思いで復旧工事にあたったのでしょうか。
 - 4 切れた堤防を締め切る工事を、一ヶ月もかからずに終えることができたのは、なぜでしょうか。
 - 5 悲しみや絶望を乗り越え、郷土を復興させた人々の姿から学んだことを話し合いましょう。
 - 6 三重県を襲ったその他の災害について調べ、その当時の体験をもつ家族や地域の方々に話を聞いてみましょう。
- ☆ 第1部の「ここが私のふるさと（P120～123）」を活用し、自分たちのふるさとのよさや、ふるさとのために自分自身ができることについて考えてみましょう。

